〈研究論文〉

# 著者と訳者の立場に関する一考察

## ― 小坂文乃著『革命をプロデュースした日本人―評伝・梅屋庄吉』[1]の中国大陸訳書[2]と台湾訳書[3]の相違点から見る翻訳姿勢の比較 ―

周　国強*

Ⅰ

グローバル化の進む現代社会においては、共通語としての英語の重要性が増している一方、一冊の書物に対する各国語への翻訳も盛んである。翻訳は古くて新しい問題である。イエスの口から実際に語られた原語の言葉を、諸民族特有の言語に置き換えられるのであろうか、というカトリック教会とプロテスタント教会を分かつ事態に発展した宗教改革の遠い昔から、翻訳は、訳者による解釈であって、そこに各個人、言語の特異性、時代背景、政治性といった要因まで考えなければならなくなってきている。

例えば、一冊の和書に対してイギリス人翻訳家の英訳がある上に、アメリカ人の翻訳家による英訳が、別に試みられるような場合に、同じ英語でありながらも、そこに相違点はおのずから生じるであろう。本稿で扱う翻訳の問題は、こうした二つの英米訳書のケースに若干似ていないことはない。しかし、単に訳者の言語能力や文化社会の違いによって発生する訳文上の相違点だけに止まらずに、ここではもっと複雑な社会的・政治的要因が、訳文上の相違点を発生させているように推測できる。本稿のテーマは、こうした推測の検証に関係している。

以下に展開する考察では、最初に『革命をプロデュースした日本人』の執筆出版を小坂文乃に促した個人的な動機と時代的背景について触れておきたい。次に、この和書の原書に見られる記述の誤りを指摘させていただき訂正しておきたい。

つづいて、中国大陸で出版された同書の中国語訳本について、総合的に原書との比較を試みる。訳者の側には、単なる不注意による思い違いや誤訳が生じてしまいがちである。そうした単純ミスを先ず指摘する。問題は、訳者側の意図的な変更点である。それらは、語句脱落、加筆、削除、改訳に分けて、該当する原文、中国語訳文、筆者による試訳を細かく列記する。

次に、台湾訳書についても、中国大陸訳書と同様の視点から、項目別に検証する。

最後に、以上の二冊の訳書、それぞれに見られる原書との相違点を互いに比較検討する。そのことによって、中国大陸と台湾の文化状況や政治事情が、こうした原書からの相違点をそれぞれに於いて生じさせたと考えられるので、訳書と訳者の本来あるべき姿に言及してみたいと思うのである。

*長崎県立大学国際情報学部准教授

## Ⅱ

2011年は、中国の辛亥革命成功百周年記念の年にあたり、中国、台湾及び日本に於いて、記念の催事が多く開催された。

中国大陸では、北京、上海、武漢、広州、香港など、孫文のゆかりの都市で、大規模の記念行事が催された[4]。先ず、2011年10月９日、北京の人民大会堂で開かれた記念式典[5]。そこでは、中国共産党の総書記胡錦濤が講演した。それに、中国各地の政府機関のみならず、各職場においても、形態と規模は違いながらも、多彩な記念行事を開催した。

また、記念切手[6]が発売され、天安門広場には巨大な孫文の肖像が立てられた。各マスメディアも連日、辛亥革命と孫文の特集[7]や報道の一色の大々的な扱いとなった。それに映画会社もまた、巨費を投じて、大物俳優を大勢出演させて、映画「第一大総統・国父孫中山」[8]と「辛亥革命」[9]を作っている。更に、テレビ局は、41回分の「辛亥革命」[10]と題する連続テレビドラマを仕上げている。

台湾側も記念閲兵式を行い、台湾の馬英九総統が演説し、記念切手も発売した[11]。

日本の民間では辛亥革命百周年を記念するため、記念講演会やシンポジウム[12]が、東京それに長崎においても開催された。そうした日本的流れのなかで、特に注目を集めた人物がいる。断るまでもなく、長崎出身の梅屋庄吉である。孫文の革命活動を財政面で支援した日本人として知られ、孫文といえば、日本人知識人の間では、この人を先ず最初に連想してしまうほどであると言えるであろう。

梅屋庄吉に関する知識と評価は、日本だけでなく中国大陸に於いても、辛亥革命百周年の2011年に先立つ形で進行していたのである。東京ギンガ堂制作の音楽劇「百年の絆――梅屋庄吉と孫文」は、2007年に始まり、中国と日本の10都市で巡回演出し好評を博したことがあった[13]。

それに、2008年５月６日。訪日中の中国国家主席胡錦濤[14]は、東京日比谷の洋食レストン松本楼[15]に訪ねて、２階に常設されている展示室で、梅屋庄吉と孫文の資料を見学している。

2009年の上海万博開催中にも、梅屋庄吉の生涯とその貢献の資料が、日本館に展示されている。その後北京、武漢、広州、香港で巡回展示し、見学者の人数は、延べ25万近くに達したという[16]。

辛亥革命百周年の2011年になると、中国武漢市の辛亥革命博物館、それに中山艦博物館に、梅屋庄吉と長崎を紹介するコーナーが設置された[17]。2011年12月10日、上海の紹興公園には、梅屋庄吉の銅像が設けられた[18]。

長崎に在住するようになった私は、関心の一つとして自然に、本稿のテーマ、東西交渉史の上で、特異な足跡を残す梅屋庄吉に注目するようになった。中国の澳門などとも同様に、この都市には、歴史性と国際性とが、美しい緑と海辺の風景のなかに、豊かに融合しているので、研究テーマに事欠かない。

## Ⅲ

原書の和書、小坂文乃著『革命をプロデュースした日本人』[19]は、2009年11月、日本の大手出版社、講談社から出版された。著者の小坂文乃は、梅屋庄吉の曾孫にあたる。また、前出レストラン、松本楼の常務取締役である。発行年の2009年11月と言えば、2011年度の辛亥革命100周年に先立つこと、２年ほど前にあたり、上で見てきたように、すでに中国大陸に於いては、

梅屋庄吉に関する各種展示会が、各地で開催されてきており、認知と再評価の動きのなかで、2011年を視界内に入れての出版企画であったように推測できる。出版当時の書評は、日本に於いて好評を得ている[20]。

中国語の翻訳は、上で触れたように二本ある。中国大陸の訳書というのは、南開大学副教授の呉艶が訳者である。出版は、2011年７月であり、中国世界知識出版社から出ている。訳書の中国語タイトルは、『推動辛亥革命的日本人――孫中山与梅屋庄吉』であり、原書の日本語タイトルとの相違点が、以下に後述するように、ここから始まっている。

台湾訳書というのは、同じ2011年10月に発行され、謝育容が訳出したものを指している。出版社は、台湾の商周出版社であり、中国語タイトルは、『国父与他的日本友人――一段被封印的史実』であった。こちらも中国大陸訳書と同様に、原書のタイトルをそのままに中国語に訳したものではないので、あわせて以下に後述しておきたい。

原書の出版も、後続する二冊の訳書も、いずれも2011年の辛亥革命百周年という特別な時期に、出版販売の的を絞った企画であったのであろうか。タイトルばかりでなく、単行本としてのデザインにも、三者の間に、それ相当の相違点が見られるので、興味深いところである。これらの差を見ると、日本、中国と台湾の間に認識の差が、透けて見え隠れしているように思える。

## Ⅳ

### １．タイトル上の相違点

原書の日文タイトルは、繰り返しになるが、『革命をプロデュースした日本人――評伝・梅屋庄吉』であった。中国大陸訳書の中国語書名は、『推動辛亥革命的日本人――孫中山与梅屋庄吉』である。日本語に直訳したら、タイトルは、『辛亥革命を推進する日本人――孫文と梅屋庄吉』となる。台湾訳書の中国語タイトルは、『国父与他的日本友人――一段被封印的史実』である。日本語にした直訳の書名では、『国父と彼の日本人友人――一つ封印された歴史』である。

三冊の本のタイトルを比較するまでもなく、原作の和書タイトルの中に孫文の名前はない。それから、サブタイトルでは明確に、評伝・梅屋庄吉と断っている。いうまでもなく、原書者の執筆意図は、梅屋庄吉の批評的伝記（A Critical Biography）なのである。ここで参考になるのは、魯迅の『阿Q正伝』冒頭に置かれた伝記の有り方に関する興味深い分析である[21]。遺族の書いた伝記は、魯迅によれば、家伝に分類されるが、遺族のみ可能となる資料と情愛敬だけ依存していたら、身内の読者に喜ばれても、広く大衆読者に訴えられるような伝記しては成功できそうにない。時代状況、社会的ニーズ、それに客観性を保ちながら、敬愛の念に貫かれて執筆したという意味合いが、サブタイトルの「評伝」に覗えないであろうか。そこのところが、二人の中国人訳者の側に、どこまで汲み取ってもらえていたか、と言う相違点の問題が、最初から発生しているのである。

中国大陸訳本のタイトルでは、原作書名にない孫文と辛亥革命を挿入したものの、梅屋庄吉は脇役になっている感じを与えてしまう。

台湾の訳本のタイトルはどうかといえば、こちらは、魯迅の分類を引き合いに出すまでもなく、全く梅屋庄吉の伝記らしい側面を与えない。彼の名前のみならず、革命にも言及していない。孫文は国父としてタイトルに登場し、サ

ブタイトルは「一つ封印された歴史」に変更されている。

**２．表紙のデザイン上の相違点**

台湾訳書の表紙には、原書と同じに、孫文と庄吉の白黒写真を使っている。中国大陸の訳書では、全く写真を使わず、米色の紙に黒色と赤字で、訳書の中国語表題を印刷しただけである。

**３．序文の上での相違点**

大陸訳書には、著者の小坂文乃さんが中国語版のために書いたプロローグが入っている。台湾訳書では、それがなく、原書の序文を中国語に訳したものだけである。ここから推測できることは、著者が中国版訳書を重視していること、それに台湾の訳者や出版社とは、事前の交流が足りなかったのではないか、という点である。

## Ⅴ

原書および二つの訳書の内容に関する問題点として、最初に原書に見られる誤りと思われる箇所をいくつか列記しておきたい。当該箇所には、誤りの引用箇所と訂正したい箇所に対して、それぞれ下線をほどこし、また引用頁を（丸括弧）のなかに明示しておく。

原書中の問題点

①：“ 廖仲愷が息子の廖夢醒に… ”（p179）。

正：娘[22]。

②：“ 周恩来も政治部副主任として在籍している ”（p239）。

正：“ 主任 ”[23]。

③：“ 柩は日章旗と中華民国の国旗青天白日旗で覆われた ”（p256）。

正：中華民国の国旗は、青天白日滿地紅であり、青天白日旗は、国民党の党旗である[24]。

## Ⅵ

大陸訳書の訳文上の問題点として、ここで指摘できる項目は、原書との各種相違点になる。それには、誤訳、見落しによる語句の脱落、原文にない説明語句の加筆（添付文字）、意識的な改訳、意図的な削除、以上の種類が含まれているので、以下の分析に於いては、それらを逐次項目別に列記しておきたい。

**１．誤訳による生じた原書との相違点**

①原書：“ …孫文と庄吉の２人を引き合わせる…”（p55）；

呉譯：“ 兩個年輕人 ”（p47）。

正：“ 兩人 ”。

②原書：“ マホガニーのロールトップデスク ”（p55）；

呉譯：“ 紅木桌子 ”（p47）。

正：“ 紅木合蓋書桌 ”。

③原書：“…無惨にも敗北した…”（p62）；

呉譯：“ 妥協退讓 ”（p55）。

正：“ 惨敗 ”。

④原書：“ 反抗すれば弾圧された ”（ｐ75）；

呉譯：“ …不斷反抗。而每一次的反抗都遭到了殘酷的鎮壓 ”（p66）。

正：“ 反抗就被鎮壓 ”。

⑤原書：“ 貧乏人とお暮らしをなさるのです ”（ｐ196）；

呉譯：“ 平民百姓 ”（p182）。

正：“ 窮人 ”。

⑥原書：“ 孫文の首には清国政府から 1000 元の賞金がかけられていた ”（ｐ66）；

呉譯： 清政府懸賞 1000 大洋追捕孫中山 ”

(p58)。

正：“清政府懸賞 1000 大洋要孫中山人頭”。

⑦原書：“…総額は 2000 円…”(p86)；

呉譯：“200 日元”(p79)。

正：“2000 日元”。

⑧原書：“…金額を数えたら 450 円くらいありました”(p116)；

呉譯：“45 日元”(p105)。

正：“450 日元”。

⑨原書：“40 萬円という懸賞金をかけて…”(p128)；

呉譯：“1000 大洋”(p117)。

正：“40 萬日元”。

⑩ 原書：“章炳麟”(p126)

呉譯：“張炳麟”(p 113)。

正：“章”。

⑪原書：“…「あちゃさん」と呼んでいたのに…”(p 33)；

呉譯：“那邊的人”(p25)。

正：“阿爹”(閩南話)。

⑫原書：“西太后の還暦を祝う大行事…”(p 63)；

呉譯：“70 大壽”(p56)。

正：“60 大壽”。

## 2．語句の脱落により生じた原書との相違点

①原書：“遠く廈門のクーロンスイに遊べり”(p 37)；

呉譯：“遠避廈門”(p29)。

正：“遠避廈門鼓浪嶼”。

②原書：“‘「清朝打倒」、「共和制樹立」を初めて組織として呼びかけたのだった”(p 64)；

呉譯なし。

正：“第一個呼籲‘打倒清朝’、‘建立共和’的組織”。

③原書：“キュー・ガーデンの廣々とした緑の中で”(p 73)；

呉譯：“在花園裏那片廣闊的綠地上”(p64)。

正：“皇家花園”。

④原書：“自敘伝『三十三の夢』のなかで革命のリーダーとしての孫文を紹介したのも滔天だった”；

呉譯なし。

正：“自傳《三十三的夢》中將孫文作爲革命領袖加以介紹的也是滔天”。

⑤原書：“噴火に立ちあう”(p 110)；

呉譯なし。

正：“在火山爆發的現場”。

⑥原書：“莊吉邸にも滞在していた可能性が高い”(p 162)；

呉譯なし。

正：“也在庄吉家住過的可能性很高”。

## 3．加筆により生じた（添附文字）原書との相違点

①呉譯：“知道這件事的只有犬養、頭山、古島、萱野和滔天」”(p 150)。

原書無し。

②呉譯：“孫中山在日本的行蹤可謂‘知者皆自知，不知者皆不曉’，在相關人士中並不是秘密”(p150)。

原書無し。

③呉譯：“終于在 1915 年 12 月，袁世凱恢複了君主制，自己當起了‘洪憲帝國’的皇帝”(p119)。

原書無し。

④呉譯：“1928 年 12 月，東北易幟”(p223)。

原書無し。

⑤原書：“そして日本がドイツの権益を受け継ぐことを主張した”(p 20)；

呉譯：“還厚顔無恥地提出享受與德國同樣權

利的要求 ”（p189)。

### ４．改訳によって生じた原書との相違点

①原書:“ 会員はハワイ華僑の資産家…”(p64)；
呉譯：“ 中産階級…”（p56)。
正：“ 有錢人 ”。
②原書：“ 清国に帰れば…”（ｐ68）；
呉譯：“ 即回到中国 …”(p60)。
正：“ 即使回到清国 ”。
③原書：“ 香港在住の中国人…”（ｐ65）；
呉譯「在香港的大陸人…」(p57)。
正：“ 住在香港的中国人 ”。

### ５．意図的と思われる削除により生じた原書との相違点

①原書：“ 戦功者の映画を見て忠君愛国の念を起こす ”（p100）；
吳譯：“ 觀爲国立戦功的影片可以樹立愛国思想 ”（p56)。
缺：“ 忠君 ”。
②原書：“ わが領土として区切られた日本の領土よ ”（p118）；
吳譯：“ 我們踏上了地球的極軸…」(p107)。
缺：“ 作爲被分割的我們日本的領土 ”。
③原書：“ 五族共和を象徴した…”（ｐ176）；
吳譯:“ 換上了象征共和国的五色旗 ”(p165 )。
缺：“ 象征五族協和…”。
④原書：“ 稀代の女傑西太后 ”（ｐ82）；
吳譯：“ 慈喜太后在得知…”(p72)。
缺：“ 稀世的女傑 ”。
⑤原書：“ レーニン、ムッソリーニと共に近世三傑と称せられる政治家だ ”（ｐ242)；
吳譯：“ 孫中山與列寧等可以被称爲近代傑出的政治家 ”（p232）；
缺：“…墨索里尼…三傑 ”（p232)。

## Ⅶ

大陸訳書の訳文上の問題点につづき、次に、台湾訳書について指摘できる項目は、やはり原書との各種相違点と言える。誤訳と語句脱落に加えて、大陸訳書に見られなかった別の問題点が二つ登場している。一つは、日本人の人名などについて、正式の日本語名を使用せずに、中国語の音譯語彙が多い点である。もう一つには、それと反対に、日本語詞彙をそのままに使ってしまい、中国語に翻訳していないケースが多い点であり、こうした語彙の使用における統一的な使用や一貫性の方針が明確に打ち出されていないのである。以下に、分析結果を逐次項目別に列記する。

### １．誤訳により生じた原書との相違点

① 原書：“ 金三百円持参…運賃一円六十銭払 ”（p27）；
謝譯：“ 攜帶現金三百萬（日元）…支付船資一萬六十錢 ”（p29)。
正:“ 攜帶現金300日元,付船費1日元60錢 ”。
②原書：“ 小柄な一人の中国人…”（ｐ54）；
謝譯：“ 一位身形嬌小的中国人…”(p58)。
正：“ 一位身材瘦小的中国人…”。
③原書：“ 目を厚い鱗で覆われていること… ”（p56）；
謝譯：“ 察覺到被覆蓋著一層厚厚魚鱗的…」(p60)。
正：“ 眼睛被一層厚厚的鱗片所遮蔽…”。
④原書：“ 母方の叔父をたよって…”（ｐ59）；
謝譯：“ 拜托母親那邊的叔父…”(p64)。
正：“ 跟隨舅舅…”。
⑤原書：“ もはや議論の季節は終わりを告げていた ”（ｐ62）；
謝譯:“ 然而談論的季節終于告一段落 ”(p67)。

正：“已經不再滿足于紙上談兵了”。

⑥原書：“鉄砲２万5000挺、短銃1000挺”（ｐ65）；

謝譯：“大炮二萬五千門，短槍一千支”(p69)。

正：“步槍2.5萬支，手槍1000支”。

⑦原書：“弁髪を切り…”（ｐ66）；

謝譯：“剪去髮髻…”(p71)。

正：“剪去髮辮…”。

⑧原書：“清国に帰れば…”（ｐ68）；

謝譯：“回到清朝的話…”(p73)。

正：“回到清国的話…”。

⑨原書：“シナリオが狂ったのはその先”（ｐ７６）；

謝譯：“精彩的故事發展還在後面”(p81)。

正：“後來事態的發展出乎所有人的意料”。

⑩原書:“米公使は日本の外務省に…”（ｐ78）;

謝譯：“美國大使…”(p83)。

正：“美國公使”。

⑪原書：“…親指の先ほどもあるブルーダイヤ…”（ｐ105）；

謝譯：“戴在拇指前端的藍寶石”(p113)。

正：“大拇指頭般大小的藍鑽…”。

⑫原書：“中日合弁の中國行興などで…”（ｐ201）；

謝譯：“…中日合並的興行等…”(p209)。

正：“中日合辦…”。

⑬原書：“渡りに船とばかりに”（ｐ202）；

謝譯：“靠著坐船渡海”(p210)。

正：“柳暗花明”。

⑭原書：“翌６月”（ｐ212）；

謝譯：“隔年６月”(p221)。

正：“6月”。

⑮原書：“最も単純なる判断に於てあり得べからざることである”（ｐ220）；

謝譯：“若是依據最簡單的判斷，也是非常有可能發生的事情”(p228)。

正：“以最單純的判斷也是不可能的”。

⑯原書：“香港在住の中国人”（ｐ65）；

謝譯：“住在香港的中国人多半数”(p69)。

正：“住在香港的中国人”。

## ２．語句の脱落により生じた原書との相違点

①原書：“（現・いすみ市）”（ｐ51）；

謝譯なし。

正：“夷隅市”。

②原書：“それには大きな理由があった”（ｐ55）；

謝譯：“這是有理由的”(p58)。

正：“這有很重要的原因”。

③原書：“ 中国と同じ東洋人であるという連帯感が…”（ｐ55）；

謝譯なし。

正：“同爲亞洲人的連帶感…。

## ３．音訳語彙の多出により発生した原書との相違点

①原書：“本田松五郎とノイ夫妻……梅屋吉五郎と妻ノブ…”(p24)；

謝譯：“本田松五郎和若伊夫婦…梅屋吉五郎和若ト…”(p26)。

正：“乃衣…伸”。

②原書：“帽子に絣の着物”(p27)；

謝譯:“‘kasuri’[25]織布做成的衣服”(p29)。

正：“身著有白色花紋的和服”。

②原書：“長崎の秋の大祭‘「長崎くんち」…”(p28)；

謝譯：“長崎‘kunchi’”(p31)。

正：“長崎宮日”。

③原書：“…「あちゃさん」と呼んでいたのに…”(p33)；

謝譯：“achysann”(p35)。

正：“阿爹”(閩南話)。

⑤原書：“そのボスがハリマという日本人で…”(p45)；

謝譯：“哈力摩”(p48)。

正：“播磨”。

⑥原書：“雑誌「ネイチャー」…”(ｐ70)；

謝譯：“雑志《Nature》…”(p75)；

正：“雑志《自然》”。

⑦原書：“エンプレイスジャッパン”(ｐ79)；

謝譯：“Empress Japan”(p83)。

正：“日本女皇号”。

⑧原書：“日本に住む妹イト…”(ｐ135)；

謝譯：“住在日本的妹妹伊德…”(p144)。

正：“住在日本的妹妹絲…”。

### ４．日本語詞彙の多出による中国語訳文上の問題点

①謝譯：“…進行了密航”(p34)。

正：“偷渡”。

②謝譯：“…時髦前衛的洋妾”(p34)。

正：“洋人的小妾”。

④謝譯：“現在香港大學的医学部”(p66)。

正：“医学院”。

⑤謝譯:“会員由夏威夷華僑的資産家…”(p68)。

正：“有錢人”。

⑥謝譯：“外來種侵入驅除了原本的在来種”(p77)。

正“原有物種”。

⑥謝譯：“同時也有外務省囑托的頭銜”(p86)。

正：“外交部委任職員”。

⑦謝譯:“照相館是對外営業的外在看板”(p92)。

正：“招牌”。

⑦謝譯：“…莊吉幫助過的中国水上警察…”(p93)。

正：“海警”。

⑧謝譯:“…《基督教一代記》等影片中”(p94)。

正：“《基督教伝記》”。

⑩謝譯:“人們稱那裏是M Pathe横丁”(p106)。

正：“胡同”、“巷”。

⑪謝譯：“以及《江戸城明渡》等多數作品”(ｐ154)。

正：“《江戸城投降》”。

⑫謝譯：“…吸引全美六十間的電影配給公司”(p155)。

正：“電影發行公司”。

⑬謝譯：“他進行聖書的印刷及出版”(p185)。

正：“聖經”。

⑭謝譯：“若要與相當親子年齢差距的慶齢結婚…”(p190)。

正：“父女”。

⑮謝譯：“…中國沿岸的島嶼及港口不得讓渡給日本以外的國家”(p209)。

正：“轉讓”。

## Ⅷ

二冊の中国語訳書を単に読み比べてみたときの一読者としての印象によれば、中国大陸の中国語訳文の方が、台湾訳本中国語訳文よりも読みやすく優れている、という感想を持った。

そうではありながらも、単純の誤訳に始まり、上で検証してきたように、意図的な改訳、加筆及び削除の痕跡が、大陸訳書に多く散見できるのである。やはり旧例に沿っての訳し方をここでも採用したためだろうか。

例えば、西太后、ムッソリーニ、袁世凱、それに日本等に対する評価などは、旧例に沿っての訳し方である、と言えるであろう。特に意図的と思われる点は、全書中に「孫文」という文字が一切登場していないことである。代わって終始使われている名称は、「孫中山」なのである。おそらく台湾を意識したのであろうか。

そのために思いがけず、事実との喰い違いを発生させる原因にもなってしまっている。「中山」は、孫文が、二次革命失敗後の1913年８月、日本に長期亡命したときに使った日本風の名前なのである。そのため、1895年３月に初めて、梅屋庄吉と出会ったときに、「中山」と名前を使うことは有り得ないのである。呉訳では、「從博士的介紹中得知，此人叫孫中山」（p45）とあり、「博士の紹介からこの方は孫中山ということを知った」の意味になるからである。

台湾の訳書の内容は、大方、日本語原文を忠実に反映しようとしているけれど、上で触れたように、どうしても訳文の文章力に見劣りがある。文法的な間違いが多い。上ですでに列記したように、誤訳のほかに、音訳と、日本語のままで使うことが、多数散見した。雑な訳方、と一言で言い切れない良さを感じながらも、こうした問題点や不足感は、訳書全体の質（quality）に、大きく影響しがちである。

台湾訳書の出版時期が、2011年10月となっている点も、この点で気になる。辛亥革命記念日に間に合わせたい出版事情のために、訳者には十分に満足できる推敲の時間的余裕がなかったのかも知れない。惜しいことである。一般読者の手の平に、自分の書物が、開かれている現実場面を想像しながら、著者も訳者も編集者も、安心できる優れた作品に仕上げてから、世に送り出したいものである。

伝記の翻訳は、小説や詩と違い、意図的な加筆、省略などは許さない。原文を尊重しなければならない。原書で伝えられている事実は、執筆者の探索・分析・判断の文学的結晶体であるのだから、訳者の感情的な観点や評論を加えて、変更していけない。もし原文に相違する訳文の加筆や省略をせざるとえないときには、訳者注を入れて、断らないといけないと思う。翻訳は国境を越えて行われるが、そこには国際法が存在しないものの、文学の事業に関わるものの間に、眼にみえない不文律のモラルや文学者魂があってもいいと思う。その意味からすれば、中国大陸の訳書には、問題が有ると思う。

辛亥革命の発生、中華民国の樹立など中国近代史上一連の大事件は、すべて大陸で起した。原書者は梅屋庄吉と他の日本の「革命志士」を辛亥革命の「黒幕」と「プロデューサー」にするため、自然に視線を大陸に向けた。

孫文は革命のために各国に駆けまわり、あちこちに革命を宣伝したとき、台湾は、すでに日本統治下に置かれていた[26]。台湾には彼の影響が及ばなかった。それにまた、孫文は、何回も台湾に立ち寄りながら、結局、日本や東南アジアに渡る際に利用した乗り続き地だけに終始したようである。台湾に知り合いもあまりいない。

梅屋庄吉と台湾の関係もそうであった。無理に知り合いと言うなら、当時の台湾総督児玉源太郎くらいしかない。そこで、台湾が辛亥革命を記念するとなると、「中華民国」というカードしか使えない。そのために台湾訳書には、肝心の表紙に「革命」も「梅屋庄吉」も「孫文」も入っていない事情を理解できる。このことは、台湾総統馬英九は記念式典で台湾意識（「中華民国」は台湾にある）を強調したこととも通じている。台湾の記念行事は、大陸と比べられないほどに静かであった。なぜなら、中華民国政府は、国民党の敗北によって1949年に台湾に移されたから、やはり自信がないようである。

大陸の方は一生懸命に自分の正統性を強調して、中国共産党は、孫文の最も忠実な後継者と自賛した。大陸のメディアは、「孫文」のことを革命の先行者と呼ぶのに躊躇しない。それで、中国大陸訳書の表紙タイトルに、「革命」

や「孫中山」や「梅屋庄吉」が、登場しても一向に構わない。それでも、原書のタイトルに出てくる「革命をプロデュース…」云々だけは、「革命を推進…」に変更した。

それに表紙のデザインには、写真を一切使ってない。おそらく原書の表紙に登場する日本姿。着物を着ているだけでなく、林語堂の英文小説に揶揄的に描かれているゴールデン・バット風の口ひげを生やしている梅屋庄吉の写真を敬遠したのであろうか。あまりにも純日本風に映ってしまうからである。なぜなら、現代中国の映画やテレビの中に、こんな姿で登場する人物は、たいてい悪役であるからだ。

## 注

1）小坂文乃『革命をプロデュースした日本人―――評伝・梅屋庄吉』（東京：講談社、2009年10月発行）。

2）呉艶『推动辛亥革命的日本人　孙中山与梅屋庄吉』（北京：世界知識出版社、2011年何７月発行）。

3）謝育容『国父与他的日本友人―――一段被封印的史実』（台北：商周出版社、2011年10月発行）。

4）中国新聞社：首都各界盛大な辛亥革命100周年記念集会を開催、胡錦濤は重要談話を発表。（2011年10月10日発表）

解放日報：上海各界盛大な辛亥革命100周年記念集会を開催、兪正声は重要談話を発表。（2011年10月10日掲載）

武漢晩報：（湖北日報記者　黄俊華　長江日報記者　楊文平　武漢晩報記者　夏琼）昨日午前、湖北省と武漢市記念辛亥革命・武昌首義100周年大会は武昌洪山礼堂で開催した。湖北省委書記、省人大常委会主任李鴻忠は大会に出席、談話を発表した。（2011年10月９日掲載）

新華社：広州10月８日（記者頼少芬）広東省各界の辛亥革命100周年記念大会は８日、広州市中山記念堂で開催された。（2011年10月８日発表）

中新社：香港９月２日（記者賈思玉）９月２日、“香港各界記念辛亥革命100周年大会”は香港会議展覧センターで開催。全国政協副主席陳奎元、董建華、香港特区政府署理行政長官唐英年、中央政府駐港聯絡弁公室主任彭清華など大会に出席。（2011年９月２日発表）

5）「人民日報」2011年10月10日：首都各界隆重紀念辛亥革命100周年。（2011年10月10日掲載）

6）「遼沈晩報」2011年10月９日：中国郵政は10月10日に「辛亥革命一百周年」記念切手を発行することになった、デザイン者は我が省の画家、魯迅美術学院教授李晨である。（2011年10月９日掲載）

7）マカオ文化局《文化雑誌》：辛亥革命百年紀念特刊（2011年11月７日発行）

北京：中国共産党の機関誌「求是」雑誌は中国僑聯党組書記、主席林軍同志の辛亥革命100周年記念文章《辛亥革命精神を高揚、多くの華僑と連携、中華民族の偉大復興に奮闘しよう》

8）広州日報：（記者　程雪超　撮影報道）　制作会社先日、映画《国父孫中山》は《第一大統領》に改名すると正式発表、更に宣伝ポスターとCMも発表した。（2011年９月７日掲載）

9）「映画」2011年第10期：《辛亥革命》は辛亥革命百年記念の祝い映画である。長影集団、上影集団等の数社連合制作、投資金額は１億円を超え、成龍、李氷氷、趙文瑄、孫淳等70名あまりの華人名優が出演した。

10）深圳特区報北京９月25日：（深圳報業集団駐京記者陸雲紅）大河史詩テレビドラマ《辛亥革命》は９月27日からCCTV－１（総合チャンネル）のゴールデンタイムで放送する。（2011年９月25日掲載）

11）台湾“中華郵政公司”は民国一百年（2011）十月十日（双十節）に《中華民国建国一百周年》（同辛亥革命一百周年）記念切手ワンセット計４枚を発行。

12）神戸新聞：「辛亥革命100年」　神戸で記念企画続々　中国近代化の第一歩となった「辛亥（しんがい）革命」から10日、100年を迎えた。「国父（国家の父）」と呼ばれる指導者・孫文（1866～1925年）は生前、多くの日本人から支援を受け、神戸ともゆかりが深い。神戸では年末にかけてさまざまな記念企画を催す。講演会「日中友好秘話　孫文と梅屋庄吉」（11月20日、孫文記念館）▽国際シンポジウム神戸会議（12月10日、神戸大学百年記念館六甲ホール）（2011年10月10日掲載）

13）キンガ堂は劇作家、演出家品川能正の作品を上演することを目的に92年に活動を開始。「下丸子演劇ふぇすた」、「フロム・エー・アクト・アライブ」、「パルテノンフェス」など国内の数多くの演劇フェスティバルの招待公演と自主公演を行ってきた。

2007年秋、日本中国10都市を巡演し、大好評を得た『孫文と梅屋庄吉』が音楽劇『百年の絆』となって還ってくる。中国の国父、孫文と日本最初の映画会社日活の創始者、梅屋庄吉の命を賭けた30年の交流を歌と踊りにのせて描く。愛と涙と笑いの音楽劇。ギンガ堂HPより

解放晨報、記者朱美虹：一方日本東京銀河堂劇団の《孫中山と梅屋庄吉》、一方日本東演劇団の《臨時病室》。昨晩、二つ日本からの新劇は、同じ日に上海に上演した。（2007年11月13日掲載）

14）中国共産党新聞網「胡錦濤松本楼を訪問したことは外部にどんなサインが発信したか。（2008年５月８日掲載）

16）長崎県庁の統計による。
17）荆楚網消息（記者黄沛）10月11日：“孙中山・梅屋庄吉と長崎”の湖北武漢プロジェクト説明会及び長崎展示コーナーの開幕式は、10月８日湖北武漢市の新しく開館した辛亥革命博物馆で行った。（2011年10月11日掲載）
　中新網武漢10月11日（張芹　張雪婷）11日：武漢市中山艦博物館の長崎展示コーナーで、“中山艦と長崎の渊源”にテーマをとし、“中山艦”と長崎の関連する歴史資料を展示ことになった。知るところでは“中山艦”の元名は“永豊艦”で、1910年－1912年長崎市三菱造船所が制造され、孫中山先生死後、“中山艦”に改名した。（2011年10月11日掲載）
18）『西日本新聞』「梅屋庄吉像を上海に長崎県友好の象徴」県は26日、孫文を物心両面で支えた長崎出身の事業家、梅屋庄吉の銅像を中国・上海市に寄贈することを明らかにした。今年が辛亥革命から100年、同市と「友好関係」を結んで15年となるのを記念した事業。10年前には同市から「友好関係」５周年を記念して孫文像を贈られ、長崎市の福建会館前に設置された。梅屋像の寄贈は返礼の意味も込められているという。像は座像で台座を含めて高さ２メートル。上海市中心部の紹興公園に設置される。粘土原型が完成しており、11月上旬に現地で除幕式をする予定。（2011年７月27日掲載）
19）講談社2009年10月発行した原著の表紙は『革命をプロデュースした日本人―――評伝・梅屋庄吉』と『革命をプロデュースした日本人』二種類がある。
20）書評ニュース：毎日新聞、2010年５月30日掲載、読売新聞、2010年１月７日掲載。
21）魯迅著・竹内好訳「阿Q正伝」『世界文学全集47巻』、pp。33－70ページ。「孔子は、『名正しからざれば言順わず』、と言っている。これはむろん、きわめて注意をようする点だ。伝の名目は多い。列伝、自伝、内伝、外伝、別伝、家伝，小伝・・・だが惜しいかな、どれもピッタリしない。」（竹内好訳、34ページ上段）。
22）参照。李湄著『我的母亲廖梦醒』中国工人出版社、2006年。
23）参照。Dick Wilson 箸・封長虹訳『周恩来伝』、国際文化出版公司出版2011年７月１日出版
24）中国黄浦军校网．www.hoplite.cn
25）kasuri は、日本語で「絣」という漢字を当てるか、単にカタカナで「カスリ」と書くときもある白地の木綿、もしくはそれで作った和服を意味している。
26）参照。Lyon Sharman: *Sun Yat-sen, His Life and Its Meaning, A Critical Biography* (Stanford: Stanford University Press, 1934)。

## 参考文献

Lyon Sharman: *Sun Yat-sen, His Life and Its Meaning, A Critical Biography* (Stanford: Stanford University Press, 1934).

Yung Wing: *My Life in China and America* (first published in 1909, reprinted by Earnshaw Books in Hong Kong, 2008).